

平成 24 年度 海外研修の実施結果（概要）

開拓者の国際感覚の涵養と農業経営の向上を図り、開拓者の農業経営の発展と開拓営農の推進に寄与することを目的とし、13 名（うち女性 2 名）が、ニュージーランド国において、平成 24 年 11 月 4 日から 10 日の 7 日間の研修を実施しました。

研修日程および研修概要は次のとおりです。

〔日程表〕

月日	現地時刻	日程	場所
11/4 (日)	15:30 16:00 18:25	成田空港集合 オリエンテーション・結団式 成田空港出発（NZ090 便）	成田空港
11/5 (月)	9:30 11:00 12:25 15:00	オークランド国際空港着 <乗継便>NZ525 便 クライストチャーチ国際空港着 リンカーン大学でのセミナー聴講 〔クライストチャーチ泊〕	オークランド クライストチャーチ クライストチャーチ
11/6 (火)	10:00 13:30 16:00	CMP カンタベリー食肉加工工場 ファイブスタービーフ ワカヌイ牧場 デイリーNZ によるセミナー聴講 (リンカーン大学デモンストレーション 農場にて) 〔テカポ泊〕	アシュバートン アシュバートン クライストチャーチ
11/7 (水)	7:50 9:00 12:00 15:30	善き羊飼いの教会・牧羊犬の像 サーモン養殖場 酪農場（Glen & Chris Goad 牧場） ワイナリー（Rossendale Winery） クライストチャーチ市内視察 〔クライストチャーチ泊〕	テカポ トワイゼル テムカ クライストチャーチ クライストチャーチ
11/8 (木)	8:30 10:00 12:30 13:50 15:00	アルパカ牧場 （Silverstream Alpaca Stud） 酪農場（Geoff & Rochelle Spark 牧場） クライストチャーチ国際空港出発 オークランド国際空港着 野菜農場（Wai Shing Ltd） オークランド市内視察 〔オークランド泊〕	カイアポイ エアウェル クライストチャーチ オークランド プケコヘ オークランド
11/9 (金)	9:00 10:40 13:30 15:45	農業コンサルタント Agfirst （Neville Woodcock 牧場にて） フォンテラ社テ・ラパ乳製品工場 LIC（ニュージーランド家畜改良事業団） 肥育牧場（John & Penny Scott 牧場） オークランド市内視察 〔オークランド泊〕	ハミルトン ハミルトン ハミルトン ケンブリッジ オークランド
11/10 (土)	9:35 16:55	オークランド国際空港出発（NZ099 便） 成田空港着	成田空港

〔研修概要〕

本年度の海外研修は、11月4日から10日にかけて実施。視察には南北の両島を訪れ、牧場・農場のみならず、大学、食肉加工場、乳業会社、農業者団体等多岐にわたり、ニュージーランド農畜産業の現状を幅広く学ぶことができた。

ニュージーランドは人口が日本のわずか約3%、国土面積は日本の約4分の3しかない国だが、1次産業が経済を担う主要産業であるとあって、どの視察先もスケールが大きかった。

<11月5日>

●リンカーン大学 (Lincoln Univ.)

ラッセル・キャメロン講師にニュージーランド農業の概要について講義を受けた。

ニュージーランドは国土面積約2,600万haに対し、農地は約1,400万haで、農地が国土面積の半分近くを占めている。特に南島では雨が少なく、広大な農地に水を撒くために灌漑設備が重要とのことだった。

同講義はニュージーランド農畜産業の概要を得られ、本研修の導入部としては大変役立つものだった。この後の南島の旅程では、講義内容どおりの巨大なスプリンクラー灌漑を何度も目にすることとなった。



リンカーン大学での講義



南島でよく見かけた
巨大なスプリンクラー灌漑

<11月6日>

●CMP カンタベリー (CMP CANTERBURY LTD)

アンズコフーズ社のグループ企業である、牛と羊の屠畜・加工工場。同工場では規定の管理プログラムによって牛を飼育している契約農家ならびに同社が認定した輸送業者からのみ生体搬入を受けており、個体管理が厳しくなされている。

視察では、クリス・ヒンドソンマネージャーを中心に、従業員の方に工場内を案内してもらった。

工場内では、屠畜は見られなかったものの、放血しているところからパッキングまでを間近で見させてもらうことができた。出荷されてく

る牛は、4種類程度の体重区分に沿って重量が揃うように飼育管理されているとのこと、枝肉の大きさにはあまりばらつきが感じられなかった。カット現場では、枝肉の大分割以降は2ラインで作業しており、ヘッドホンで音楽を聞きながら作業しているためか、リズムミカルで手際よい流れ作業だった。

CMPの工場は国内に5カ所あるが、同工場の規模が一番大きく、900~950人（季節労



次々と流れていく牛肉

働者がいるため変動)の従業員が働いているとのこと。同工場でカットされた牛肉は、日本、EU、中東、中国などに輸出されている。生産から一貫した管理体制、安定した質はとても強みになると感じた。

●ファイブスタービーフ・ワカヌイフィードロット (FIVE STAR BEEF LTD WAKANUI FEEDLOT)

ニュージーランドでは、広大な土地を活かした放牧肥育が盛んであるため、穀物肥育を行っているところは珍しい。そのような中で、1万頭以上の規模を誇るニュージーランド最大のフィードロットが、ファイブスタービーフ社のワカヌイ牧場だ。日本市場に牛肉を輸出するため、アンズコフーズ(株)と伊藤ハム(株)の合弁事業として設立され、Non-GMO 飼料、成長ホルモン・抗生物質フリーにて牛を肥育している。

ジェイミー・ゴードンゼネラルマネージャーに場内の案内を受けた。同牧場では、肥育期間の違いによりロング、ミドル、ショートと3種類のプログラムが組み立てられ、耳標で管理されている。そのうち、ミドル肥育の牛は「オーシャンビーフ」という名称で日本に輸出されている。今後、年間3万4,000頭を飼育する予定だとゼネラルマネージャーは語っていた。

各個体の様子は3名のスタッフが馬で見回っており、約670haの広大な敷地を馬が駆けていく光景は異国を感じさせた。



広い場内を馬で巡回する

●デイリーニュージーランド (DAIRY NZ)

リンカーン大学のデモンストレーション農場にて、デイリーNZのコンサルタント、キム・レイドさんにシェアミルクিং制度について説明を受けた。デイリーNZは生乳の課徴金により運営されている団体で、酪農家の収益性を高めるための経営コンサルティング等を行っている。



説明をするキム・レイドさん(左)

シェアミルクিং制度とは、農場オーナーと牛の管理者(シェアミルカー)で農場の利益を一定の割合で按分する制度。農場所有者と牛の所有者が分かれているのである。農場オーナーはシェアミルカーと契約、搾乳等の牛群管理を任せ、自身は土地や設備等を管理する。シェアミルカーは銀行で融資を受けながら牛群を導入し、管理する。初めは少ない牛群、少ない利益配分(オーナー6:ミルカー4など)でスタートし、段々と利益配分を5:5まで上げ、最終的にミルカーは得た利益で農場オーナーとして独立を目指すという、ステップアップの仕組みとなっている。

しかし、最近では企業所有の農場も増えてきており、シェアミルカー希望者も減少傾向にあるとのこと、ミルカーたちのモチベーションを上げていくことが課題だと、レイドさんは話していた。

ちなみに、このデモンストレーション農場はデイリーNZやリンカーン大学を含む、7つ

の酪農関係企業・団体で運営されており、1年で4回フォーカスデーとして、近隣の生産者等に対し、生産データ等の公開をしているとのこと。

<11月7日>

●グレン&クリス・ゴード（Glen&Chris Goad）牧場

グレン&クリス・ゴード牧場では、約255haの敷地に、約1,000頭を放牧飼育している。

夫人のクリス・ゴードさんに話を伺った。同農場では、夫と4人のスタッフが働いているとのこと。品種はホルスタイン、ジャージーとその交雑だそうで、すべて放牧であり、子牛に代用乳等を飲ませる必要もないため、低コスト運営が可能という。搾乳はロータリーパーラーで行っている。また、生乳は独立系乳業メーカーのシンレイ・ミルク社（Synlait Milk Ltd）に出荷しているとのこと。

今年は例年より気温が低く、牧草の成長が遅れているため、別途牧草を与えていることが現在の悩みであると、ゴードさんは話していた。



敷地で放牧されている牛



手土産を受け取るゴード夫妻

●クライストチャーチ市内視察

市内のスーパー等を視察した。牛乳は写真左のようなボトルに入れられており、一見すると洗剤かと思ってしまう。また、牛乳、低脂肪乳、無脂肪乳のほか、カルシウムが添加されたものやフレーバーが付けられた乳飲料が並び、種類が多い。

スーパー内には陳列の精肉コーナーと、対面の売り場があった。陳列棚には「Do you know?」と書かれたPOPがあり、部位の説明が書かれている。これは日本でもよく見る光景なので、やはり部位の説明は来客からも求められるところなのだろう。

クライストチャーチの街はどこも工事中だらけ。バスが入れない道もあり、2011年に起こった大地震の被害の大きさを物語っていた。また、この日宿泊したホテルも受付のあった場所が被害にあって工事中のため、コンテナを改装した仮設小屋を使用していた。震災後、このようなコンテナ店舗が増えたという。観光業もニュージーランドの大きい産業のため、早い復興を願うばかりだ。



種類豊富な乳飲料



精肉棚の説明 POP



道路はどこも工事中

<11月8日>

●シルバーストリーム・アルパカ牧場 (Silverstream Alpaca Stud)

クライストチャーチ郊外にある同農場は、約 16ha の敷地に約 250 頭のアルパカを放牧している。国内のアルパカショーで優勝したこともある農場だ。農場を経営しているジョンソン夫妻に話を伺った。

アルパカは 1986 年に初めてニュージーランドに導入され、クライストチャーチ近郊を中心に、2 万 5,000 頭ほど飼育されているとのこと。アルパカの毛は、アンゴラやメリノウールに引けを取らない品質で、高級繊維として注目されているようだ。とても柔らかく、軽くて暖かった。

また、同農場は家屋の一部を宿泊施設としても利用でき、ファームステイ客も訪れる。



敷地内に放れているアルパカ

●ジェフ&ロシェル・スパーク (Geoff&Rochell Spark) 牧場

農場主のジェフ・スパークさんに話を伺った。

同農場は、200ha の農場を 2 ヶ所所有し、合計で約 1,500 頭を飼育しており、ロータリーパーラーにて搾乳、生乳はフォンテラ社に出荷している。シェアミルクカー制度を利用しており、牛の管理はシェアミルクカーが行い、設備投資等、牧場や土地に関することはスパークさんが管理しており、利益は 50% ずつ配分している。設備関連については 100 万 NZ\$ (約 6,500 万円) ほど投資したとのこと。ニュージーランドでは 1980 年代の改革により、農業関連の補助金が廃止されている。資金調達について聞くと、行政からの助成は無く、銀行からの借入れのみで購入しているとのこと。

また、約 17 万 m³ の貯水池を所有しており、夏場はその水を使うとのこと。貯水池の水はおよそ 18 日分だという。水の不足は放牧酪農にとって致命的なのである。



貯水池の説明をするスパークさん

●ワイ・シン社 (WAI SHING LTD) 野菜農場

北島に移動し、まず訪れたのがワイ・シン社の野菜農場だ。同社は中国移民 2 世の 3 人兄弟により経営されており、生産、パッキング、輸出・販売までを一貫して行っている。輸出担当のデイビット・ショートランドさんに説明を受けた。

農場は約 600ha あり、取り扱っている野菜の 70% は輸出 (他農家から集荷したものも含む)、30% を国内流通している。不適合品が 10% ほど出るらしいが、それは全て運賃のみで畜産農家にあげているとのこと。主な輸出先は日本や EU で、カボチャやタマネギ等を輸出している。日本は品質に厳しく、やはり国内流通品より輸出品のほうが



洗浄し、袋詰めされたニンジン

がグレードは上だそうだ。

野菜の洗浄機や耕耘機等の大型機械が同農場には欠かせないが、メンテナンスには専用のメカニックを雇っているとのこと、製品に関することは本当に全て自社内で行っているようだった。

<11月9日>

●アグファースト コンサルタント社 (AgFirst Consultants NZ Ltd)

アグファースト社は畜産業を始めとし、農業における灌漑・排水設備のアドバイスや事業・経営に関する分析等のコンサルティング業務を行っている。

視察では、実際にコンサルティングを受けているネヴィル・ウッドコック牧場（肥育）にて、生産・金融・経營業務を担当しているコンサルタントのニコラ・ウォーさん、農場主のネヴィル・ウッドコックさんに話を伺った。

同農場は、牛と羊を放牧しており、敷地面積およそ 350ha。放牧地は丘陵地で、見渡す限りの草原がウッドコックさんの敷地とのこと。牧草の肥料は自家用セスナで石灰を散布するそうで、その広さにただ驚くばかりだ。

牛は 450 頭ほどのアンガスを放牧、自然交配させており、年に 1 頭雄牛を導入するだけで、他に導入はしないそう。アンガスピュアの牛肉として付加価値をつけて販売できるとのこと。

北島では南島と違って雨が降るため、灌漑設備には頼らなくていいようである。



ニコラ・ウォーさん（右）と
ネヴィル・ウッドコックさん（中央）

●フォンテラ社 テ・ラパ工場

(Fonterra Co-operative Group Ltd. Te Rapa Site)

フォンテラ社はニュージーランド最大で、世界第 4 位の乳業会社。テ・ラパ工場は粉乳やクリーム等を製造している乳製品工場だ。工場内では、ロアナ・ジェンナー・ブラウンさんに案内を受けた。

同工場は 24 時間稼働しており、1 日に 900 万リットルの生乳処理能力があるというから驚きだ。工場は国内に 27 ヲ所あり、処理量を超えた場合、他の工場に応援を頼むとのこと。なお、南島で集乳した分は南島の工場での処理をする。

工場内にはミルクドライヤーと言われる巨大な設備があり、粉乳を製造している。1 時間に 20 トン超ものスキムミルクや全乳粉などの粉乳が製造されるそう。

工場はほぼオートメーション化されており、従業員はあまり見かけられなかった。袋詰めや、パレットへの積み上げに至るまでも自動で行われており、人気がないのに製品が出荷段階となって積み上げられていくのは不思議な光景だった。



テ・ラパ工場エントランスにて

●LIC（家畜改良事業団 Livestock Improvement Corporation）

LIC は、国内の農業者が出資する協同組合で、国内の酪農家のほとんどが加入しており、

データ等の提供を受けている。アーロン・ウォレスマネージャーにニュージーランドの酪農について説明を受けた。

ニュージーランドでは、酪農家1戸あたり平均386頭を飼育しており、平均面積は140ha、飼料の85%は放牧草とのこと。今回視察した酪農場は平均よりも大きい農場だったようだ。

しかし、これだけの酪農大国なのだから、乳牛は研究され、さぞかし乳量が多いのだろうと思っていると、乳量は1頭あたり年間平均4,000リットル程度だという。ニュージーランドでは乳価は乳固形分量で決まられており、水分量が多くても買い取り価格は上がらないそうで、LICでは、乳固形分を多く含む牛乳を搾乳できる牛の改良を進めてきた。「乳牛の体格が大きくなりすぎることは、その分の飼育コストと乳固形分量が割に合わず無駄だ」と、ウォレスマネージャーが説明していたのが印象に残った。

LICでは酪農家のデータを1億件ほど保管しているとのこと、牛群検定、牛乳分析、トレサビ情報、統計資料などの情報提供を行っている。経営マネジメントのアドバイス等も行っているそうである。



LICでの講義風景

●ジョン&ペニー・スコット プuketawa牧場 (John&Penny Scott PUKETAWA Farm)

スコット夫妻に話を伺った。

同農場では約300haの敷地に約230頭シンメンタール牛と約440頭の羊を放牧飼育している。肥育をメインにしているというよりは、シンメンタールの雄を育成し、敷地内でオークションして販売している。生体の販売に適さなかったものを肉用としているとのこと。

放牧地の入口には扉がなく、家畜が逃げないのか聞いたところ、入り口部分の床がやや幅の広いスノコ上になっており、逃げられないようになっているとのことだった。

また、同農場の管理は夫妻が2人でしているが、違う場所でご子息が酪農をされているとのこと。



スノコ状の床



シンメンタール牛



手土産を受け取るスコット夫妻

今回の研修では、ニュージーランド農業のスケールの大きさに一同驚かされた。牧場においては、頭数が多く、放牧飼育であっても個体管理がきちんとされていることについても舌を巻いた。参加者の中には、このような形態の農業は日本では不可能であり、参考にならないといった声も聞かれた。しかし、これが農産物輸出大国ニュージーランドの現状であり、現実にニュージーランド産の農畜産物は日本にどんどん入ってきている。また、日本市場を意識して生産されているものも多い。国内で競合することが今後も増えていくだろうニュージーランドの農畜産業を目の当たりにして、日本はどのように立ち向かうの

か、或いはどのように共存していくのかを考えさせられる研修だった。

